教養科目における地方自治体との地域連携教育の課題と可能性
－福山市との連携を通して－

鶴崎　健一*

Problems and Possibilities of Regional Cooperation Education between a University and Municipality in Liberal Arts Subjects:
Based on the Experience of Collaboration with Fukuyama City

Ken-ichi TSURUSAKI*

ABSTRACT

We offer a course called “Regional issues learned in Bingo” in collaboration with Fukuyama City for students at Fukuyama University since 2015. This course is in the form of PBL (Problem Based Learning) that focuses on local issues. This course is expected to enhance students’ ability to set tasks and apply knowledge, as well as enhance their communication skills. The theme of the course is to improve the image of the Ashida River, which flows through Fukuyama City. The image that the water of the Ashida River is dirty water has been established through 40 years of negative press. In this subject, many people declined from the initial registration. This is perhaps due to a perception that troublesome contents such as field work and group work would be involved. On the other hand, the satisfaction of the students who took the course was relatively high. In this lesson, providing early motivation, such as through a thorough explanation of the lecture, is considered necessary for students. In addition, we ultimately want students to continuously participate in the community-based projects; however, the students have not yet reached that point. In the future, it would be good for students to think of these kinds of projects, not just as a class, but as something that will lead to regional collaboration.

キーワード： 教養教育、地域連携、アクティブラーニング、フィールドワーク

1. はじめに

大学の重要な役割の一つとして地域貢献が強く叫ばれるようになって久しい。大学の地域貢献には、大学で得られた知見を地域に提供するための知の拠点となる、地域で活躍できる人材を養成するための教育を行う、企業や自治体などと共同研究や開発を行う、ということが考えられる。文部科学省においても大学の地域貢献を重視しており、私学助成の私立大学等改革総合支援事業タイプ３「地域社会への貢献」として、地域連携（地域と連携した教育課程の編成や地域の課題解決に向けた研究の推進など、地域の経済・社会、雇用、文化の発展に寄与する取組を支援）と地域プラットフォーム（大学間、自治体・産業界等との連携を進めるためのプラットフォーム形成を通じた大学改革の推進を支

*大学教育センター兼任教員・共同利用センター教授

援）が設定されている[1]。

著者の所属する福山大学についても、地域に根ざした大学として地域で活躍できる人材の育成を目的として、「瀬戸内の里山・里海学」研究プロジェクトの推進など、知の拠点としての取り組みや地域で活躍する人材の養成に取り組んでいる[2]。

また、福山大学では全学生を対象とした共通教養科目の科目群として「地域学」を設置している。「地域学」は、「備後地域の風土、文化、芸術、経済および産業を学んで地域をよりよく理解し、地域を育み、地域に貢献する精神を涵養する」を学修目標としている。この科目群は地域の防災リーダーの養成のため防災士認定試験の受験資格を得ることを目的とした科目群と福山大学が位置する備後地域を題材に地域について学修する科目群の 2 つのカテゴリーに分けられる。備後地域を題材に地域について学修する科目群に関して、2017 年度の本紀要[3]『教養科目としての地域学の課題と展望－福山大学での取り組みを例として－』、および、2018 年度の本紀要[4]『学びの場としての地域と学生の志向－教養科目としての可能性－』において、地域学全般について学問体系について検討し、大学教育、特に、教養教育における地域学の展開と地域貢献の可能性について論じた。

ところで、備後地域を題材に地域について学修する科目群は、「備後地域学」、「備後に学ぶ地域の課題」および「松永に学ぶ産業と文化」の 3 つの科目で構成されている。そのうち、「備後に学ぶ地域の課題」は 2015 年度に 1 年生の後期科目として開講され 2019 年度で 5 回目が終了した。この科目は 2017 年度の本紀要[3]で示したように、地域の課題などを題材としての PBL（Problem Based Learning：「問題解決型授業」）や各種事業への参加、学外調査などを利用したアクティブラーニングを取り入れた授業を教養科目に設置する構想から生まれた。実施には福山市との包括協定のもと、企画財政局企画政策課と協働で、福山市の抱える様々な問題や課題についてフィールドワークなどを通じて学習し、それらについて学生同士でディスカッションをしながら、学生の視点から解決策などを考えていく科目となっている。そこで、本稿では 5 年間の実施状況から、本科目について成果や課題を検証することで、地域連携教育のあり方について検討する。

2. 教養科目「備後に学ぶ地域の課題」について

「備後に学ぶ地域の課題」は、上述のように福山市企画財政局企画政策課と協働で、福山市の抱える様々な問題や課題について学習し、学生同士でディスカッションをしながら、学生の視点から解決策などを考えていく科目として計画された。地域における様々な課題の解決策を体験学習やグループでの議論を通して考えることで、本科目を受講した学生は、課題設定や知識の応用ができる（技能の習得）、また、コミュニケーション能力が高まる（態度の習得）ことが期待できる。そして、この授業で学生の発想した解決策などが福山市へフィードバックされて何らかの形で活かされる、さらには受講した学生がそれにリーダーとして関与できるようになることも期待している。つまり、大学の地域貢献の一端を担う企画に発展できる科目として考えられたものでもある。

具体的な実施内容としては、本科目の初年度である 2015 年度から福山市経済環境局環境保全課の協力で、福山市に位置する一級河川の芦田川の見学、水質検査体験等を行うフィールドワークをもとに、イメージアップ企画を考える授業を行なった（表 1、各年度の具体的内容の報告は 2015 年度～2019 年度の本紀要[5-9]に掲載）。芦田川は近年水質改善が進んでいるにもかかわらず、中国地方の一級河川の中では 40 年に亘って汚いというイメージが定着している。このイメージを払拭することは福山市として大きな課題となっているので、市民に向けたイメージアップ企画を学生に考えてもらうことをテーマとし授業展開を行なった。なお、フィールドワークは、福山市経済環境局環境啓発課で企画している市民大学のふくやま環境大学に同行することで実施した。ふくやま環境大学は、「ふくやまを住みよいまちにするため、環境に関する知識を学んだり、体験的な学習を実践する」目的で実施され[10]、その中の企画の一つが芦田川の環境に関するものであった。見学だけでなく、ふくやま環境大学の聴講生と一緒に簡易水質検査や生物採集などの実習、それをもとに芦田川のイメージと実際の状況について討論をすることもあり、学生にとって知識の習得だけでない経験を積むことができる

内容となった。

表１　各年度で提案された企画内容

年度	グループ名	人数	企画テーマ	企画内容
2015	芦田川を紹介し隊	3	パンフレット「芦田川ってこんな川！」	芦田川を紹介するパンフレットの作成
	ASD	4	ホームページ「そうだ芦田川に行こう」	芦田川を紹介する専用のホームページの作成
2016	イメージアップ	4	ポスターでイメージアップ	芦田川のイメージを刷新するようなポスターの作成
	今と昔	4	芦田川紹介パンフレット「みんなの知らない芦田川」	「みんなの知らない芦田川」というタイトルの芦田川の歴史を掲載したパンフレットの作成
	生物	4	芦田川魚消しゴムガチャガチャ	芦田川にすむ魚の消しゴムのガチャガチャの作成
2017	めがね	3	芦田川移動水族館	芦田川を模した移動水族館で小学校などを訪問し、芦田川を知ってもらう企画
	あっしー	3	イメージアップ ～変わりつつある芦田川～	メディアを使った情報発信で、芦田川についての Q&A 新聞、街頭インタビュー、YouTube での情報発信
2018	ASHIDAGAWA IS ANBIRIBABO!	2	川について学ぼう	小学生を対象とした資料と関連のクイズで川について学習するイベントを行う企画
	本当の芦田川を知り隊	2	芦田川検定	芦田川の知識を知ってもらうための「芦田川検定」をバラ祭りなど地域イベントで行う企画
	Team 芦田川ラリーズ	2	芦田川 RALLY	芦田川流域で行うウォークラリーイベント
2019	イベント考案班	3	川を使った遊び、清掃	小学生を対象とした芦田川河岸での川遊びのイベントやキャンプ、そして QR コードを使った芦田川沿いでのウォーキングイベント
	チーム鯛	3	芦田川に関する本作成	芦田川の今の姿を知ってもらうために「私をよくみて知って」というタイトルの本の作成

学生の企画提案内容（表 1）は、「芦田川を紹介するためのコンテンツ作成」（ホームページ、新聞、本、ポスター、パンフレット、ガチャガチャ用消しゴム）、「芦田川周辺を利用したイベント企画」（ウォークラリー、キャンプ、川遊び）、「芦田川を楽しく学習するためのツール作成」（芦田川検定、芦田川に関するクイズ、移動水族館）の 3 つに大きく分けられる。これらの中には、例えば 2018 年度 「Team 芦田川ラリーズ」による芦田川流域で行うウォークラリーなど、行政などと連携することで実現可能と思われる企画も考えられたと思う。

3. 教養科目「備後に学ぶ地域の課題」に対する受講状況と学生の意識

「備後に学ぶ地域の課題」についての登録者数は、表 1 に示すように各年度とも 10 名を切る程度の人数（2015 年度 7 名、2016 年度 12 名、2017 年度 6 名、2018 年度 6 名、2019 度 6 名）で少人数での授業となった。学生の履修動向を詳細に検討してみると初期登録時（4 月末頃の前期登録時点）の受講希望者数は、初年度（2015 年度 7 名）を除き、概ね 30 名程度（2016 年度 33 名、2017 年度

24 名、2018 年度 26 名、2019 度 27 名）であったが、前期終了頃～後期開始前に学内の学生ポータルシステムを用いた履修要件の確認連絡（グループワーク、フィールドワークを実施すること）の後に 15 名程度に減少し、さらに初回の履修説明後に 10 名を切る程度の人数になった。つまり、履修要件の確認連絡後だけでなく、初回の授業の後にも多くの辞退者が出るという結果となった。履修の辞退を直接申し出た学生に理由を聞いたところ､フィールドワークを実施する日程(「アルバイトがある」、「他の授業が重なっている」、「クラブの遠征がある」など）、グループワークの実施（「議論するのが苦手である」、「初めて顔を合わせた受講生と一緒にできるか自信がない」など）が原因となったようであった。

なお、フィールドワークを実施する日程およびグループワークの実施については、シラバスにもその旨記載しており、また、上述のように事前連絡も行っているが、周知が必ずしも徹底されていないことが分かった。

これに加え、上述のように 2017 年度以降、前期登録の履修予定者には事前に確認連絡を行なったのだが、授業初回の学生の動向をみると確認を怠っていた学生が少なからず存在していた。また前期終了頃～後期開始前の確認連絡では、フィールドワークに参加する人数を把握するために、辞退する場合は事前連絡するように伝えていたが、登録を抹消する際に連絡をしてきた学生は数名であった。本稿の主題とは異なるが、学生ポータルシステムを用いた連絡の有効性も検討しなければならないと思われる。

なお、大学として地域学を重視する観点から、2017 年度からは特に新入生向けに履修登録の指導の際の配布資料に「F 群　地域学の案内」を加え、学内に数カ所あるインフォメーションディスプレイで紹介し、さらには履修期間中には著者の担当している教養科目あるいは比較的受講生の多い「備後地域学」の初回に延べ 500 名近くの学生に対して「備後に学ぶ地域の課題」の内容紹介をしてきた。しかしながら、上述のように必ずしも学生に情報が十分に伝わっていない結果となった。

最終的に受講した学生へのアンケート（表 2）でこの科目を履修した理由について問うと、47%が「科目名を見て興味を持ったから」、23%が「単位が取れそうと思ったから」であり、「シラバスを読んで興味を持ったから」は 10%であった。つまり、最終的に履修を決めた受講生もシラバスを必ずしも十分に確認していていない状況にあったと考えられる。実際に初回の説明の際にフィールドワークについての問い合わせも受けている。学生の教養科目の履修選択においてのシラバスの意義が問われる結果となった。一方、「その他」の理由として、「前期の備後地域学で宣伝されていた『芦田川探検ツアー』を見て、芦田川の上流の方には行ったことが無かったのでこのツアーに参加して芦田川を上流から下流まで巡ってみたいと思ったから。」とあるように、上述のような他授業での呼びかけも全く効果がないわけではなかった。

本科目が設置されている教養科目については、卒業要件の制限はあるものの約 70 科目から選択できるので、最終的に履修するかどうかは学生の自由意志によるので規制することはできない。語学などの必修科目や専門科目など、ある程度強制がかかる授業であれば嫌い、あるいは苦手な内容であっても受講することになるが、教養科目については学生の意思が履修に大きく影響するので惹きつけるのが難しいと考えられる。つまり、授業内容が通常の講義形式と異なり、学生の履修辞退の理由にあるようなグループワークやフィールドワークなどを面倒な内容と感じてしまうと、興味関心よりも手間をかけずに単位取得に結びつきやすいと思われる科目の選択を優先する学生も少なくないと考えられる学生の受講動向となった。

表 2　「備後に学ぶ地域の課題」受講後のアンケート結果（2015 年度～2019 年度の 30 名分）

質問項目	%
この授業を履修した理由を教えてください。	
科目名を見て興味を持ったから	47
シラバスを読んで興味を持ったから	10
空き時間を埋めたかったから	7
単位が取れそうと思ったから	23
その他*	13
授業の難易度は、皆さんにとって適切でしたか。	
簡単すぎて、つまらなかった	0
比較的、簡単だった	13
適切だった	73
比較的、難しかった	13
難しすぎて、分からなかった	0
この科目に対する総合的なあなたの満足度を 5 段階で示してください。	
満足	43
ほぼ満足	37
どちらとも言えない	20
やや不満である	0
不満である	0
来年度、今回と同様の内容（企画等の変更はあるかもしれません）で講義を行う予定にしています。その際に、今回の経験を生かしてお手伝いをしてもらえますか。	
他の授業と重複しなければ是非したい	23
条件によってはしても良い	47
するつもりはない	30
＊ その他の理由	
・ 前期の備後地域学で宣伝されていた『芦田川探検ツアー』を見て、芦田川の上流の方には行ったことが無かったのでこのツアーに参加して芦田川を上流から下流まで巡ってみたいと思ったから。	
・ 神石高原町の問題には詳しいが、福山が抱える課題には疎かった。この授業を通じて、福山の抱える課題に触れようと思ったから。	
・ 友達と相談して入りましたが、しかし友達はとってなかったです。	
・ 教養教育科目の単位を集めるため。	

※ 2 回目まで無記名、3～5 回は福山大学の LMS（学習管理システム：Learning Management System）の設定の都合上、記名でのアンケート

4. アクティブラーニングの場としての「備後に学ぶ地域の課題」

授業にアクティブラーニングを取り入れることは、文部科学省からも推奨され、私学助成においてもアクティブラーニングの推進が挙げられている[1]。上述のように「備後に学ぶ地域の課題」は、まさに福山市を中心とした備後地域の抱える問題・課題をテーマにそれらを解決する方法を探る PBL 形式の授業であるので、アクティブラーニングそのものである。

ところで、PBL を取り入れた授業においてうまく機能しなかった事例を集めた「アクティブラーニング失敗事例 ハンドブック」が公開されている[11]。このハンドブックは文部科学省「産業界ニーズ事業」（平成 24-26 年）の中部地域の 7 大学で実施された取り組みにおいて最終成果をまとめられたものである。この中には、指導における失敗例（9 項目）、評価に対する失敗例（5 項目）、その他（カリキュラムや組織的取組など）の失敗例（7 項目）がそれぞれに対する対策についての考察も含めて記載されている。この中の「指導 4. 社会人基礎力の向上が認められない」（pp. 13-14）に＜問題行動＞として、「実際の業務で利用している企業の担当者を招聘して外部特別講師講義を行い、専門知識の必要性や運用について話してもらっても、学生は興味を示さず、講義に集中しない。」という記述

がある。「備後に学ぶ地域の課題」の初回の授業では、芦田川の現状について福山市環境保全課長に60 分程度の講義をしてもらった。その際の学生の受講態度をみると 2 回目以降の受講を取り消した学生については、上述のように講義に集中しない態度が実際にみられた。ハンドブックには＜原因＞の一つとして「1 年次では、社会人基礎力の向上が社会に出てから必要不可欠な資質であることを学生自身が充分に認識していない。」ということが挙げられていた。このハンドブックでの特別講師は企業の担当者ということで、本授業とは状況が異なる部分もあるが、1 年次生が多数を占める本授業でも講義に興味を持てないという部分においては、学生自身が提示さているテーマの重要性を認識できていない可能性が高い。つまり、社会人として地域と自分との関連が十分に認識されていないことが映し出されているものと考えられる。一方、本授業の受講を継続した学生のうち福山出身者ではない学生つまり芦田川を知らない学生も、授業当初は少し戸惑いも見られたが、その後はスムーズに授業を実施できた。ハンドブックの失敗事例のように学生の能力や興味関心が不足して議論が進まないということもなく、人間関係でのいさかいも見られなかった。これら学生は社会人として地域と自分との関連を十分に認識していたからと考えられる。

また、同ハンドブックの「他 4. 科目目的とカリキュラム位置の不明確による指導の困難性」（pp. 41-42）に、＜問題行動＞として「教員の関与度合いが低い取り組みでは、学生は自分たちの勝手な思い込みにより低いレベルで自己満足し、また最終成果達成への危機感も欠如している。」とある。本授業においても、いくつかのグループにおいて低いレベルで自己満足をしているような状況が見られた。ただし、教員の関与が強くなると学生の自主性を損なう可能性が高く、＜結果＞にも記載されているように「社会人基礎力育成の機会を減らすような強力な教員関与は、プロジェクト実施の意義自体を損ねる。」ことになる。これについては、本授業の 2018 年度、2019 年度には、松永はきもの資料館を利用して、一般に公開した発表を行うこと[8、9]で、学生なりの最終成果達成への危機感や緊張感を持たせることにはつながったと思われる。

本授業を受講した学生の満足度も低くはない（表 2、 「満足」と「ほぼ満足」で 80%）ので、本科目のような PBL 型のアクティブラーニングは学生にとって意義のある授業と思われる。また、授業の難易度（表 2）についても「適切だった」との回答が 73%を占め、「比較的、簡単だった」、「比較的、難しかった」がどちらも 13%であり、受講した学生にとっては丁度良いバランスで展開できたと考えられる。一方で、このような形式の授業において受講の辞退を減らすためには、初回の授業での導入で学生に興味関心を引く工夫が特に必要であることが示された。フィールドワークやグループワークを実施するためには、学習効果を高めるためには十分な事前準備が必要であるので、これまでも事前打ち合わせを複数回重ねてきた。また、この科目を開講した時から携わっている福山市経済環境局環境保全課の担当者は、福山市で企画しているふくやま環境大学での指導や小中学生向けの環境啓発講座などの経験があり、フィールドワークの事前指導やグループワークの際にも、大学教員と遜色のない指導を学生にしていただいたと考えている。しかしながら、特に初回の授業の導入部分で学生に興味を持ってもらうための工夫に改善の余地があるということになる。

2020 年度には、芦田川のイメージアップを考えるというテーマは継続しながら、前半に福山市戦略推進マネージャーの協力で、テーマへの学生の興味を高める工夫を行いつつ、グループワークの技術的な支援も得ながら授業を展開する予定である。フィールドワークの日程が原因となる辞退を避けることは難しいが、それ以外での辞退が少なくなる可能性を秘めていると思われる。

5.「備後に学ぶ地域の課題」を履修した後の課題と展望

「備後に学ぶ地域の課題」は、『2. 教養科目「備後に学ぶ地域の課題」について』でも記述したように、学生に課題設定や知識の応用ができる（技能の習得）、また、コミュニケーション能力が高まる（態度の習得）ことを期待した授業である。一方、本授業が含まれている「地域学」群は、地域で活躍できる人材の育成を目的として設置された科目群である。本授業も備後地域で問題になっていることをテーマに授業を展開することで、学生に地域への関心を喚起し、ひいては学生に積極的に地域

の問題解決に参加してほしいという願いがある。これまでの 5 回のテーマとなっている芦田川のイメージアップ企画についても、実現可能と思われるものについて、環境保全課に協力いただきながらブラッシュアップして一緒に実現しましょうと受講生に提案している。ところが、授業終了後には積極的に関わろうとする学生は残念ながらこれまでいない。

一方、2017 年度においては FM 福山に協力いただきラジオ番組で 2 人の受講生に授業の成果を紹介してもらい[7]、また、上述のように 2018 年度と 2019 年度には松永はきもの資料館にて成果を正規の授業時間外で発表してもらった。どちらも強制ではなく受講生の意思確認を行った上での実施であったが、シラバス記載の授業時間外で行なった事前準備にも関係したほぼ全員の受講生が参加した上で発表に至っている。ところが、それらを実現させるところまで関わろうという学生がいないということは、企画案を考える思考段階までは興味を持って行うが、いずれの企画においても実際に実施するということには少なからず責任を負うことになるため、積極的になりきれずに避けているのかもしれない。他方で、受講後アンケート（表 2）で、次年度の同科目について、フィールドワーク等の補助に参加する意思があるかどうかを聞くと、「ぜひ参加したい」「条件によっては参加したい」という回答が 70%であった。この点については記名となるため成績評価への影響を学生が意識したと考えられる点を割り引いても授業の内容を否定的に見ているわけではなく、授業で行っている企画内容に関わることを拒否しているわけでもない。

学生の意思を尊重しつつ、受講生と地域とが協働して企画を実施するためには、教員や行政機関の働きかけが重要であるのだが、上述のように現状はうまくいっていない。教養科目においては、学部学科で行う専門科目や卒業研究でのプロジェクトに学生が関与するのと異なり、同じ学生が継続的に参加することはなく、また、参加人数を前もって推測することが難しいこともあり、数年にわたってある事業を行うようなプロジェクトの一環として授業構築を行うのが難しい現状にある。

このような状況を改善するために、2020 年度には、上述のように福山市企画政策課の協力で授業の企画内容を一部見直す予定にしている。芦田川のイメージアップを考える内容は踏襲しながら、福山市戦略推進マネジャーの協力のもとで身近な問題を考える重要性、グループワークの技術、成果を実現する難しさや楽しさなどを受講生に理解してもらう内容としたいと考えている。また、大学と地域との連携を強化する取り組みについても本稿を作成時点で計画しており、その一環として「備後に学ぶ地域の課題」も位置付ける予定としている。本科目が受講生にとって単なる知識を身に付ける科目ではなく、地域協働へと繋がる科目へと発展させたい。

注

1 文部科学省　令和2年度文部科学省　概算要求等の発表資料一覧（令和元年8月）高等教育局
09 令和２年度概算要求 私学助成関係の説明
URL：https://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/__icsFiles/afieldfile/2019/09/05/1420670_09.pdf

2 福山大学ホームページ　研究・産学連携　助成金事業・プロジェクト　福山大学ブランディング推進のための研究プロジェクト
URL：http://www.fukuyama-u.ac.jp/research/project/branding.html

3 鶴崎健一（2018）「教養科目としての地域学の課題と展望−福山大学での取り組みを例として−」福山大学大学教育センター紀要『大学教育論叢』第4号：pp. 69-81.

4 鶴崎健一（2019）「学びの場としての地域と学生の志向－教養科目としての可能性－」福山大学大学教育センター紀要『大学教育論叢』第5号：pp. 91-98.

5 鶴崎健一（2016）「平成27年度「備後に学ぶ地域の課題」の実施報告」福山大学大学教育センター紀要『大学教育論叢』第2号、pp. 169-172.

6 鶴崎健一（2017）「教養教育科目F群「備後に学ぶ地域の課題」平成28年度実施報告」福山大学大学教育センター紀要『大学教育論叢』、第3号：pp. 135-140.

7 鶴崎健一（2018）「「備後に学ぶ地域の課題」平成29年度実施報告」福山大学大学教育センター紀要『大学教育論叢』第4号：pp. 183-186.

8 鶴崎健一（2019）「「備後に学ぶ地域の課題」平成30年度実施報告」福山大学大学教育センター紀要『大学教育論叢』第5号：pp. 211-218.

9 鶴崎健一（2020）「「備後に学ぶ地域の課題」令和元年度実施報告」福山大学大学教育センター紀要『大学教育論叢』第6号：印刷中.

10 福山市ホームページ　2019年度（令和元年）ふくやま環境大学のごあんない
URL：http://www.city.fukuyama.hiroshima.jp/uploaded/attachment/135522.pdf

11 平成26年度　東海 A(教育力)チーム成果物「アクティブラーニング失敗事例 ハンドブック」
URL：https://www.nucba.ac.jp/archives/151/201507/ALshippaiJireiHandBook.pdf